



●配色調和理論のデザインへの応用

配色調和を勉強した後に机上論だけではなく実技で応用してそれを活かす事が生活の中で大切な事だと思います。

そこで今回はアパタイトという透明感のあるブルーを基調に五つのポイントのデザインを考えて配色調和理論にのっとり考えてみました。

イメージは、草木のようなデザイン。心地よい調和。世界三大ヒーリングストーンを用いてラリマーの水色、スギライトの紫、チャロアイトの紫と緑のマーブリングした石、それらをバランスよく配置してアパタイトの中心にはペリドットの黄緑を入れてリピテーションのデザインにまとめました。

天然石の配色をする時には、色相環配色や明度彩度の配色のバランスの他に光や反射なども考慮して最後には身につけて心地よい事が大切だと思います。(幹事：田森恭子)



●JIS 鉛筆、色鉛筆に用いる芯の色

工業製品に用いる色の規格の一つに、「JIS S 6006 鉛筆、色鉛筆及びそれらに用いるしん」がある。

事例の一つとして、「表3 一色鉛筆及び色鉛筆用しん」の内容を示してみる。

表3には、一つの色名が、仮名、漢字、英文名で示されているが、その表内の漢字色名だけを下に示す。

薄紅色、紅色、赤、紅樺色、朱色、赤茶色、茶色、焦茶色、だいだい色、蜜柑色、土色、黄土色、朽葉色、山吹色、たまご色、黄色、レモン色、黄緑、松葉色、灰緑、緑、エメラルドグリーン、深緑、常盤色、青磁色、薄青緑、青緑、納戸色、水色、薄青、青、藍色、薄群青色、群青色、藤色、藤紫、堇色、薄紫、紫、赤紫、濃赤紫、桃色、白、ねずみ色、灰色、黒、金色、銀色の48色である。

「表10-色鉛筆用しんの色度」があり、各色の色相、明度、彩度の基準値と許容範囲がマンセル値を用いて規定されている。

類似のJIS規定に「クレヨン及びパス」や「水彩絵の具」、「マーキングペン」、「シャープペンシル用しん」などが存在する。

以上は、2013年発行のハンドブックによる。
(永田泰弘)

●日本の伝統的な色名・紫

色の名前で、古事記や日本書紀の中に登場する色名は間違いなく日本の伝統色と言える。日本書紀の中に、紫、黒紫、深紫、赤紫、浅紫などの色名がある。

「紫の朱を奪う」という言葉があり、陰陽五行説で古代より正色とされていた朱に代わり、間色の紫がその地位を奪うことを言う。冠位十二階の順位では、紫は第一位の色となっている。御所正殿の名も「紫宸殿」と呼ばれて現在に至る。

草木染めで紫に染める紫草は、ムラサキ科の多年草で、山地に生え、高さ三十から六十センチで、六、七月頃に白い小花をつけ、赤紫の根は太く、根が染料になる。「みなしぐさ」「ねむらさき」とも呼ばれていた植物である。

また、「濃き」「淡き」だけで濃い紫、薄紫を指すと言う色の表現がおこなわれていた。

紫式部による「源氏物語」は、紫をテーマとした文学作品であり、更に、紫式部日記、紫式部集の作者である紫式部は藤原為時を父に、宣考を夫とし、藤原道長に認められて中宮彰子に仕えた女官である。式部とは式部省の役職名である。
(永田泰弘)